

本セッションでは放射能関連の報告が３編、地震関連の報告が１編あり、特別セッションということもあり、非常に多くの聴衆が会場を埋めた。

2-D-09-3 は、筑波山における放射性セシウムの動態を事故直後からモニタリングしており、土壌に蓄積した放射性セシウムがわずかではあるが渓流水へ流出していることが報告された。今後、森林生態系内での循環や下流水域への影響などについて、研究が進められことを期待したい。

2-D-09-4 は、東京湾の底質における放射性物質の空間分布について解析を行っており、放射能濃度は河口付近においてピークを示し、湾内では小さいことが報告された。今後、河川や東京湾内における掃流砂の移動速度や除去プロセス、東京湾への流入量や流入・流出速度を算出していくことが必要である。

2-D-10-1 は、震災後地盤沈下が確認された干潟について、アサリを代表種とした生物種の影響調査報告で、アサリの個体数は昨年度同時期と比較して約４割の減少が観察されたものの、震災後でもアサリの生存が確認されたという内容であった。急激な環境の変化が底生動物に与える影響を調査する貴重な研究であり、今後も継続して調査を続けていく必要があるだろう。

2-D-10-1 は、溶存体放射性核種の迅速な分析手法の開発に関する報告で、放射線核種に選択的な吸着性を有する吸着ディスクを内蔵したパッシブサンプラーを使用することで、従来の方法と比較して短時間で分析が行え、さらに、試料採取時の安全性を確保できるという内容であった。今後、オンサイト測定によるデータの蓄積・検証が研究を進めて行く上で鍵となる。

（国総研 対馬 育夫）